

## ◇ 「記紀」 本来の筋書

前五世紀に北九州で始まる水田稲作は、前四〜三世紀に瀬戸内沿岸・畿内・北陸・東海から出てくる。で瞬く間に広がり、同じ頃に北九州で流行った土器様式が畿内・北陸・東海から出てくる。弥生中期後半から後期にかけての鉄器も、近畿の北部から集中して見つかる。伊弉諾が銅矛と鉄劍十握劍をかざして国生みする領域は、九州から隠岐島・吉備・四国・畿内・越前・佐渡島に及んでいた。銅劍・銅鐸・銅矛の分布は、これと重なる。

これらは、北九州に都して青銅祭器で先祖を祀る厳之国王朝、倭国王朝、倭奴国王朝らの勢力が東海地方まで押し寄せてきて、青銅器文化や鉄器文化を広めた痕跡なのである。

【突帯文系土器の分布】、縄文晩期後葉に北九州で成立した突帯文系土器が瀬戸内沿岸・近畿、さらに北陸から東海西部を結ぶ辺りまで広がり、それ以东には東北系土器が出る。

【遠賀川式土器の分布】、弥生前期の遠賀川式土器が伊勢湾や敦賀湾を結ぶ線まで広がり、それ以东に東北系の土器が対峙する形で出てくる。

「伊弉諾紀」、「先ず淡路洲・淡洲を以て胞として、大倭豊秋津洲を生む。次に伊予二名洲。次に筑紫洲。次に隠岐洲と佐

渡洲とを双生む。次に越洲。次に大洲。次に（吉備）子洲」、

「瓊矛を以て指し垂して探りしかば、オノゴロ島を得たまいき」、「彼の嶋に降り居まして、八尋之殿を化作つ」



【物語のあらすじ】 水田稲作が縄文晩期の日本列島に伝わって以来、大和朝廷成立まで、那珂つ国あめのと天之国あめの、越オロチ族の敵之国いつの、倭国やまと（天之国と日高の連合政権Ⅱ高天たかま）、豊葦原中つ国とよあしはらなか、伊都国いづ、倭奴国ヤマト（倭国と豊葦原中つ国の連合政権Ⅱ天地あめつち）、邪馬台国の七つの王朝が立て続けに興った。

一世紀前半、福岡平野西に天宮（天上の都）した倭奴国王朝は、女系天神を推戴して若狭辺りから東海まで治めていた。六代天神から政を託された日隈の伊奘諾期、即ち一八〇年代に、東の副都（唐古）を治める豊受皇太神（月読命、伊奘諾太子、天之国宗女・向津姫の入り婿）がオロチの三輪氏と組んで謀反し、天叢雲、オロチの天照大神、水穂の天神と称して邪馬台国を興した。王朝方は出雲の決戦で大敗し、南国の熊襲に逃げ込んだ。この天下の入れ替わりが倭国大乱だ。

以後、倭奴国王朝ヤマトは、向日の高天たかま（日前ひのまえ）ひのくま）↓和国王朝ヤマトに発展、畿内邪馬台国（オロチの敵之国王朝を再現↓天（敵）之国王朝↓日本王朝に発展）に割れて争った。

一八〇年代末、向津姫は高千穂に天宮して日神の天照大御神に立ち、倭奴国王朝再現に動いた。二二〇年代前半、日神は南北の外敵に備えるとして天孫天火明を邪馬台国に送って日高見国を立てさせる一方、もう一人の天孫火瓊瓊杵に薩摩降臨・日前建国を命じた。その直後、夫の治める邪馬台国に向かった。その途上で、夫が急逝した。纏向入りした日神は、女王ヒミコに立つや、オロチの敵之国王朝を天（敵）之国王朝に衣替えした。ここに、高天の女系天神は途絶えた。

数年後、火瓊瓊杵ほのににぎは火照ほでり・火闌降ほせり・火折ほせりの三皇子に恵まれた。天火明あめのほあかり（二代垂仁）も本牟智和氣ほむちわけ（紀では誉津別ほむつわけ、本書では火火出見ほほでみ）をこしらえた。皇子らが成長すると、女王は天孫に命じた。「両家の嫡子は相手の家に養子入りして、家の絆を揺るぎないものとせよ」

その結果、火折が邪馬台国に天降って蒼津別に成りすまし、火火出見は火瓊瓊杵の養子に入った。二三八年、絶頂期にあつたヒミコは、魏の都に使節を送つた。同じ頃、火照（海幸彦）と火火出見が日前の太子の座を巡つて争い始めた。敗れた海幸彦は、命乞いして火火出見に謝罪した。「僕は、今より後は、汝命の昼夜の守護人となりて仕え奉らむ」

二四〇年代後半、天火明（二代垂仁）が女王の座を奪おうとしたが、失敗して常陸に遁走した。その後のヒミコは、火瓊瓊杵の兄・火照（海幸彦、火明）を日向から招いて火明饒速日と名のらせ、日本王朝を立てさせた。二四〇年代末にヒミコが逝くと、彼は前王朝を日本朝に組み入れた。二六五年、二代女王トヨ（豊鍬入姫）が晋に使節を遣つて朝貢した。その直後、火明饒速日はヒミコの墓（円壇から円墳に改築）を前方後円墳（箸墓）に造り変えるや泰山に見立てて封禅し、天神天照国照彦火明饒速日（三代垂仁）と語つて倭奴国王朝の再現に努めた。その一方で、火火出見との誓約を消し去りたい一心から、景行を熊襲征伐に向かわせたが、惨敗してしまった。

二八〇年代前半、火明饒速日は、再度、仲哀に熊襲征伐を命じた。このとき、和王に立つた磐余彦は、祖父の遺志を継いで磐余彦火火出見と語るや、祖父に成り代わつて東征を決断した。

十余年後、彼が奈良盆地の磯城一帯を制圧すると、火明饒速日は宝器を差し出して降伏してきた。三〇一年元旦、磐余彦火火出見（神武）は、大和朝廷を開いて初代天皇に即位すると、火明饒速日の兄・可美真手を物部氏と語らせた上で軍事筆頭職に任じ、朝廷と宮殿の守護を厳命した。ここに、日神の夢見てきた倭奴国王朝再現とともに、火火出見・海幸彦の誓約が晴れて叶つた。

三〇四年二月二十三日、神武は鳥見山中に齋場（桜井茶白山古墳）を造営して郊祭し、皇天二神（日神夫妻）を天神に配して皇祖皇宗に奉つた。併せて伊勢に宗廟を開き、皇天二神を祀つた。

☆天之国、倭国、倭奴国、高天は大和朝廷の祖国。邪馬台国の天（厳）之国、日本は倭奴国の傍流。火明饒速日は邪馬台国の天神。景行はその倭王。大日本王綏靖く開化は八道の都督。

【「記紀」本来の王系譜】

① 「「記紀」の王系譜を正した上で、歴史物語に組み上げました。その筋書と王系譜は、倭人伝など中国資料、各地の伝説、古社の縁起、地名の由来、海部氏系図、『播磨国風土記』とも合致する。☆本書は、歴史物語として進展していく中で、そのつど検証できるように綴られています。言わば、量子物理学の解明法である帰納的手法にならない、本説の証明を試みた次第です。

〔倭（和）〕 豊受皇太神（天照大神）

伊奘諾 190年代 220年代 250年頃 301年大和朝廷樹立

天之尾羽張 日神 火瓊瓊杵 火火出見 神武 崇神 応神

2 豊鍬入姫 3 倭迹迹日百襲姫

〔邪馬台国〕 倭女王 1ヒミコ 2トヨ 3/4 神功 5倭（迹迹）姫

（天神） 天照大神・天鹿兎山 / 火明饒速日

（倭王） 垂仁（饒速日／天火明／火明饒速日）

景行

（八道の都督、道主） 成務／仲哀

〔大日本王〕 綏靖 孝靈 孝元 開化 崇神

前660年頃 四世紀 神功

【「記紀系譜」神代

日神の天照大御神 火瓊瓊杵 火火出見 神武 綏靖 開化 崇神 垂仁 景行 成務 仲哀 応神

磐余彦 大日本王八代 邪馬台国の天神と倭王

あめつちひら

はじめ

ひとつのものな

くこのとこたち

『日本書紀』、「開闢くる初に・・天地の中に一物生れり、神となる。国常立尊と号す」

『後漢書』、「二年春正月、北郊を立て、后土を祀る。東夷の倭奴国王、使を遣わして奉獻す」

『古語拾遺』、「開闢くる初に、伊奘諾・伊奘冉の二はしらの神、共為夫婦たまいて、大八洲

② 丹後の籠神社は日本最古の海部氏系図（国宝）を伝えてきた。これと「記紀」系譜、『先代旧事本紀』の尾張氏系譜を重ねると、皇統万世一系を根底から覆す王系が浮かび上がってくる。

始祖彦火明 天火明 — ○ — ○ — 三世孫倭宿禰（珍彦） — 武振熊

始祖彦火明 天火明 — ○ — ○ — 天香語山命 — 孫天村雲命 — 天忍人 — （以下略）

〔合成系図〕

饒速日（天孫、先代旧事本紀の饒速日） ※……養子

天火明（天孫） — 火火出見 — ○ — 倭宿禰（珍彦） — 武振熊（神功の將軍）

日神 — 忍穗耳 — 火瓊瓊杵（天孫） — 火照（海幸彦、火明、火明饒速日）

火スセリ — 火火出見 — う草葺 — 磐余彦（神武）

神功

☆ 渡来人たちの築いた弥生史は、魂再来、古の善政・孫子の「戦わずして勝つ」再現に挑んだ歴史でした。本物語では、記紀の不可解な話や矛盾が自然消滅する上に、真経津鏡が内宮、日前鏡が日前神宮、天叢雲劍（草薙劍）が熱田神宮、十握劍が石上神宮、日矛が国懸神宮、天羽羽矢が神武と饒速日に伝わる経緯がつぶさにわかります。

① 天（厳）之国王朝、日本王朝、和国王朝はいずれも、もと倭奴国。  
【天之国、倭国（高天、天之国十日高）、倭奴国、日本国、厳之国（越オロチ族）の生い立ち】

倭奴国 天（日の神、太陽）を崇拜する倭十地の神を奉る中つ国（奴国）系 天と地からなる国  
☆ 天地（天は円形、地は方形）の国体を図形化すると、方格規矩鏡や前方後円墳と同形

『晋書』や『魏略』逸文、「倭人は」太伯の末裔と自ら言う」

『史記』、「韓の歴史を遡ると、その公室の先祖は、周と同じく姬氏を姓とした」

『隋書』『倭国伝』、「漢の光武の時、使を遣わして入朝し、自ら大夫と称す。安帝の時、また使を遣わして朝貢す、これ倭奴国という」

『旧唐書』『倭国日本伝』、「倭国は古の倭奴国なり。・・その王、姓は阿每氏なり」、

「日本国は倭国の別種なり」、「日本は旧小国、倭国の地を併せたり」

「倭人伝」、「夏后小康の子は会稽に封ぜられると、髪を切り、体に入れ墨して蛟竜の害を避けた。倭人の海士も海に潜つて魚貝を捕え、体に入れ墨して大魚・水鳥を払いのける」

『史記』『越王勾踐世家』、「越王勾踐の先祖は禹王の末裔、夏后帝小康の庶子である。会稽に封じられた後、禹王の祭祀を勤めとさせられた。・・体に入れ墨し、髪を結わずに・・」

☆越都のあつた紹興近くには、今も禹を蛇神として祀る廟が残るといふ。

☆参考までに、越の字は漢音では越、呉音では越と発音して、越（高志）は和風の読みだ。

②皇室の歴史を記した「記紀」や、邪馬台国について伝える「倭人伝」などから、それぞれの国情を伝える語句を抽出して、中国史書とも照合するとこうなる。

「記紀」神話…大和朝廷…天（日）を崇拝

荆蛮に逃れて断髪文身した呉の太伯（周太王の長男、姫氏）↓呉王夫差の一族

↓越に敗れて江南から渡来↓天之国……………倭国

晋分家の韓（姫氏）一族↓秦に追われて朝鮮から渡来↓日高国……………

「倭人伝」…邪馬台国…鬼道・殉葬

会稽に移封された夏后帝小康庶子↓断髪文身した越王勾踐の末裔

↓楚に敗れて江南から渡来↓越才口氏族の敵之国

☆平安朝の頃、『日本書紀』講習会での質疑、「この国が姫氏の国と呼ばれるのは、なぜか」

【中国と倭国の王朝変遷は、瓜二つ（内乱と天下統一、内乱と王朝再興、内乱と三国鼎立）】

前二四世紀？ 前一一世紀 前五世紀前半～前三世紀後半 前二二一年 前二〇二年

（中国）五帝時代↓夏↓殷↓周↓春秋／呉越の戦い／戦国時代↓秦帝国↓漢王朝↓

八年 一八年 一二五年

↓「新」王朝↓赤眉の乱↓（後）漢王朝（高祖末裔が王朝再興）

一八四年 二二〇年 二三〇年代前半

黄巾の乱 ↓（漢滅亡）↓三国鼎立―魏、呉、蜀漢（漢朝とのつながりは不詳）

二八〇年 三二六年

↓司馬氏（魏の臣下）率いる晋が天下統一↓（晋滅亡）↓五胡十六国の乱世

前二三世紀？ 前五世紀前半 前四世紀後半 前三世紀後半 前三世紀後半

（倭国）那珂つ国／天之国↓オロチの敵之国王朝↓内乱？↓倭国王朝（高天、天之国末裔が王朝樹立）

前二世紀後半 前一世紀中頃 一世紀前半 一世紀前半

↓豊葦原中つ国王朝↓伊都国王朝↓内乱？↓倭奴国王朝（天地、倭国末裔が王朝再興）

一八〇年代中頃 一九〇年前後（吉野ヶ里の敵分家） 二二〇年代前半 二八〇年代前半

倭国大乱 ↓三国鼎立 高千穂郷の高天↓熊襲に天降った日前↓和（いづれも倭奴国末裔）

畿内邪馬台国（三輪系敵之国王朝）↓天（敵）之国王朝 ↓日本王朝  
出雲の葦原中つ国／奈良盆地の大日本国

二八〇年代中頃 二九〇年代末 三〇一年

↓神武（和王磐余彦）東征 ↓和が天下統一、大和朝廷樹立（倭奴国末裔が王朝再興）

↓七世紀以降、日本勢が隆盛↓『日本書紀』『旧唐書』『倭国日本伝』『宋史』『日本伝』

☆日本の由来を知ること、弥生史、邪馬台国史、大和朝廷誕生の経緯が詳細にわかります。